

2021年8月9日(月)

老球の細道624号

尊敬するコーチ新井春生先生との出会い⑥

会津バスケットボール協会 室井 富仁

東京五輪において日本女子が日本バスケットボール界史上初の銀メダルという快挙を成し遂げた。五輪開催の前は何かと男子バスケットボールばかりがもてはやされていた(NBA選手が加わる)が、大会が始まると男子は予選全敗、女子は平均身長最低にもかかわらず決勝進出。しかも、身長の手短を克服してくれると期待されていた渡嘉敷選手の戦線離脱というアクシデントを乗り越えてのことだから凄かった。やはり成せば成る。

ところで、身長が大きく影響するバスケットで世界2位という快挙は過去にも一度あったことを知っているだろうか。五輪ではなく世界選手権においてである。1975年(昭和50年)南米コロンビアのカリで開催された第7回大会で日本代表チームは、決勝でソ連に敗れたが見事準優勝に輝いた。それによって翌年に開催されるモントリオール五輪の出場権を獲得したのである(この五輪から女子バスケットが五輪初開催。五輪は5位)。

この快挙は私が大学4年の時で、今でも忘れないで覚えている。日本代表は今回のチームよりさらにちびっこチームであったが、大会最優秀選手に163cmの生井けい子(当時日本体育大学助手)が選ばれたのは快挙であった。さらに日本代表のエースとして活躍した大塚宮子選手(171cm、日立戸塚)は新井春生先生の市郵短大時代の教え子であった。その後、新井先生の教え子たちを擁する日立戸塚が日本女子バスケット界を席卷するようになる。

前回に引き続き、前能代工業監督加藤廣志氏と新井春生先生との出会いについて、残りの部分を加藤氏の著書『高さへの挑戦』から紹介したい(最終回)。

【彼の実践していた中高一貫指導は、練習をともにしている中学選手たちを、そのまま安来高校に進学させることによって成り立っていた。公立高校として画期的な指導法だった。

「女子選手を見ている我々の場合、ちょうど子供から娘、そして女性へと成長していく過程に立ち会うことになる。精神的に、あるいは肉体的にどう変わっていくのかを的確にとらえておかなければ、理にかなった指導は不可能」と新井は力説した。

一貫指導をより充実させるために、彼は選手たちのデータづくりには人一倍力を注いでいた。彼が、表紙に『全国制覇五か年計画』と毛筆で記した一冊の綴りを私たちにを見せてくれた。百科事典一冊よりもまだ分厚いその綴りは、新井が指導した過去の選手達の成長の記録をもとにしてつくられた長期計画書だった。自分が集計したデータをもとにした練習メニュー、強化策がぎっしり書き込まれていた。

「ただ漫然とした練習だけで子供たちの二、三年後を見通すことはできない。自分なりのビジョンを確立することが指導の第一歩。それができなければチームを育てることなどはできないからね」。私は、新井の言葉を一言も聞き漏らすまいと努力した。

安来に来て良かったと私はしみじみ感じた。たった二日間の安来滞在だったが、自分がこれから歩む方向をしっかりと確認できたような気がしていた】

〈続く〉